

タルカット女史の鳥取伝道と

鳥取英和女学校

渡 辺 久 雄

教育者であるとともに極めて熱心な伝道者でもあったタルカット女史は、神戸スクールの運営のすべてをクラークソン女史に委ねると、他の婦人宣教師とともに神戸周辺地域の伝道に従った。^①一方、新しい校長の就任を機として、これまで神戸ホーム、神戸寄宿学校、神戸の女学校、神戸諏訪山の女学校などと呼ば馴らされていた校名は、この頃（一八七九年）に「神戸英和女学校」となったようである。^②しかし英和女学校という名称は、正に日本的発想であったから、宣教師達の間では Kobe College が定着するまでは各人各様の表現をしていた。

伝道に専心したタルカット女史は、一八八〇年（明治十三年）岡山の地に赴任し、ベリー博士邸に滞在しながら活動を続けた。^③岡山には既に一八七九年（明治十二年）に伝道団の岡山ステーションが設けられ、岡山教会もできていたので女史の活躍ぶりが偲ばれる。ところが一八八二年（明治十五年）、神戸スクールのクラークソン校長が病氣となり、帰国が決まったので、タルカット女史は伝道団から呼び戻されて神戸英和女学校の校長代行を勤めることとなった。

この頃には、有能なエミリー・ブラウン女史やスーザン・ソール女史が相次いで神戸英和女学校の教師として来日し、学校運営に有力な人材を得たので、タルカット女史も来日以来一〇年ぶりで、一八八三年（明治十六年）、賜暇休暇に

よって帰国した。^④そして二年後の一八八五年(明治十八年)秋、再び来日して岡山の地に戻った。

タルカッタ女史が初めて鳥取の地を訪れたのは一八八六年(明治十九年)の春であった。このことが一八八六年四月十九日付岡山発信、クラーク博士宛書簡^⑤に「私は鳥取の西海岸に向かって出発しようとしているところです。ここ岡山を離れるのは容易ではありませんが、来て欲しいという先方の声が高い為です」と書かれている。しかし実際の鳥取入りの日付は明らかでない。この点に関して、タルカッタ書簡では四月十九日付が前述の岡山発信、次の九月七日付が京都比叡山発信であるから、女史の鳥取入りは四月後半から八月末の間であつたに違いない。ただ、後述する現地側の編集史料によると、これに引用された六月二十五日付の山陰隔日新報の記事が、六月二十二日夜の鹿野町におけるタルカッタ女史の演説のことを掲げているので、この日付以前に既に鳥取入りをしていた可能性がある。

さて、山陰鳥取の地は、早くも一八七九年(明治十二年)夏、同志社第一回卒業生の元良勇次郎が最初の伝道をしており、翌一八八〇年(明治十三年)には、神戸女学院第五代院長シャロット・B・デフォレスト女史のご両親ジョン・H・デフォレスト師夫妻と、大阪教会の上代知新牧師^{かじろ}が訪れ、個人の宅や劇場などを借りて伝道を行ったことが『鳥取教会七十年史』^①や『ミッシェン・ニューズ』(Mission News. 以下MNと略記)一九〇六年十二月号の中の、ローランド師の記事「鳥取に於ける初期の活動」^②において詳細に述べられている。

タルカッタ女史の最初の伝道については、前述したように、一八八六年(明治十九年)六月二十五日付の山陰隔日新報の記事に「英国宣教師タルカッタ女史は、去る廿二日夜、鹿野町^{しかの}糒屋又平方にて傍聴人四百名を限りて演説せしに、聴衆満員となりて空しく帰りし者最も多かりき」とある。^③英国宣教師と書いているのは、英語を話す者はすべて英国人と考えていたからであろう。しかし同じ新聞記事でも一八八七年(明治二十年)四月十八日付のものは「米人宣教師トリーカッ氏は十九日神戸から岡山を経て来鳥。二十五日から元魚町一丁目キリスト教説教所に於て毎日午後三時より

四時迄、同教徒の壮年に英語授業を行なう。五月二日には神戸から来着したキリスト教青年会員の馬場種太郎・根鈴岩吉・井伊松藏等がキリスト教の演説を行なう」とあり、また一八八八年（明治二十一年）四月十四日付の記事は「昨年来鳥のタルカート女史は、今月下旬ローランド、ペテロ^⑩の二氏と共に来鳥。鳥取英和女学校の教師となる由」と書かれていて、タルカート女史が伝道以外に教育の分野にも活躍を始めたことがわかる。

しかしこの頃の女史の活動根拠地は、やはり岡山であり、鳥取へは毎年ある期間伝道に訪れたようである。例えば一八九〇年（明治二十三年）四月十二日付で、横浜からクラーク博士宛に出した書簡^⑪には、「ご承知のようにミス・マクレナン（Miss McLennan）と私は、雪のために山越えが困難となる前に戻らねばならぬことを心に留めながら、去年の秋に鳥取に行きました。しかし、この冬の数か月、岡山よりも当地が私達をより多く必要としているという確信が日増しに強くなり、ついに今年の三月迄留まってしまいました。

女学校は、教育に関する世間一般の偏見に対して闘ってこななければなりませんでした。偏見というのは、この女学校の教育が、キリスト教徒の対立者である仏教徒たち、あるいは少なくとも、しばしば支配階級に名を連ねる反キリスト教徒たちによって開設された女学校（私立鳥取女学校で、後に公立となり、現在の県立鳥取西高等学校に至る・筆者註。以下「」内の章句は筆者が補ったものである。）よりも、良妻賢母の義務について不適当であるというのです。この

学校（鳥取英和女学校）はとにかく隆盛ではありませんでした。従ってこの冬中、私たちの願いは忍耐と好意を通して仕事することでした。私たちの仕事は、そう遠くない日に、対立しているこの二つの学校が、一つになるようにすることでした。勿論、私たちはキリスト教の学校を支持することに熱心である点を示すことは、必要でありました。

私にはちょっとした倉吉訪問がありましたので、マクレナン女史が日曜日の午後、神戸スクール（神戸女学院）の卒業生で、鳥取英和女学校で教えているミス・ヤマワキ（山脇 花を指す。後の井深花子夫人）の協力により、彼（東京から来

た裁判官某」に聖書を教えることに同意してくれました」とある。

このタルカット女史の手紙に対応するマクレナン女史の書簡も、ついでに掲げることにする。この書簡は、『ライフ・アンド・ライト』(Life and Light for Woman. 以下LLと略記)の一八九〇年七月号に「ミス・アイダ・マクレナンよりの手紙」と題して載っているものである。即ち「私はあなたに、この冬の当地での活動について、ほかの人びとがお便りするかもしれないことは幾分かあった内容のお話をしようと思います。私が当地に來た十月には、一〇〇哩半径の円内では、私一人が英語を話す唯一の外国人でした。」

前掲のタルカット女史の手紙によると、一緒に鳥取入りをし、協力して伝道していたと思われるのに、この手紙では必ずしもそうではなかったようにも受け取れる書きぶりに、いささか戸惑いを感じる。史料の上では、もう一つ両者の手紙と関連を持つ記事が、同じLLのJapan Missionの項に出ている。^⑭その内容は、「タルカット女史とマクレナン女史は、数週間の滞在のつもりで、秋(一八八九年の秋を指す)鳥取に出かけたが、急を要する仕事があり、翌年の三月迄滞在した。その仕事の内容はマクレナン女史により七月号「前掲の手紙を指す」に書かれている。二人の任務は去年の秋に來日したホルブルック女史(Dr. Miss Mary Anna Holbrook)と、ストーン女史(Miss Cora A. Stone)によって今春から、しっかりと引き継がれた。ホルブルック女史は新しい任地の印象を「まさに播種を待つ春の肥沃な土地」に譬えている。――中略――タルカット女史は京都における婦人たちへの伝道と、とりわけ看護学校に関する仕事とを託されて、ここから京都に移った。スミス女史はこの学校の仕事のため新潟から戻った。マクレナン女史は岡山の女学校(山陽英和女学校を指す)の仕事を託された。」

また同誌には、同じ一八九〇年(明治二十三年)五月十四日付で、アルモナ・ギル女史(Miss Almona Gild)の岡山発の手紙“A Story of Japan”が載っている。^⑮その中で「Amaki〔現在の倉敷市天城〕は小さな町です。しかし多くのキリ

スト教関係の仕事をしている人びとの誕生地として良く知られています。われわれの町の福音伝道者のミスター・モリタもここで生まれましたし、鳥取英和女学校教師のミス・ヤマワキ〔山脇花〕の家もここに在ります。彼女は献堂式で読まれる美しい日本語の詩を送ってくれました。」

次は鳥取英和女学校のことであるが、廃校後既に六五年も歳月が流れており、何回かの現地調査や手紙による問い合わせにも拘らず、結局第一次史料に遇うことはできなかった。従って第二次史料によらざるを得なかった。即ち『鳥取県史・第四巻近代―社会篇・文化篇』、『鳥取県史・第五巻近代資料篇』、『鳥取県教育史』、『鳥取教育百年史』、『鳥取教育百年史余話』、『鳥取県の私学』、『鳥取西高百年史』、『鳥取教会七十年史』、『女学雑誌』のバックナンバー。神戸女学院同窓会誌『めぐみ』のバックナンバー。松尾茂『明治初期の鳥取県政』。鳥取英和女学校の校長で、ある時期に鳥取教会牧師をも兼任した井伊松蔵氏の長男の井伊玄太郎氏により、昭和四十二、三年の『山陰評論』に寄稿された鳥取英和女学校に関する一連の記事等である。

もう一つの史料系譜は鳥取伝道に関する宣教師文書であり、これは貴重な第一次史料と言えよう。また先に掲げた編集史料の中でも、その記事が、事象の生じた年月日に比較的近い時期に書かれたもの、例えば『女学雑誌』、『めぐみ』誌のバックナンバーの如きは第一次史料に準ずるものであろう。

次に現地編集史料から眺めてみよう。まず『鳥取県史』の本篇・資料篇^⑪は、公的記録である点で最も重視すべきではあるが、県全体の記録の為、一私立女学校に関する記事はわずか数頁にとどまっている。即ち「鳥取県において、最初の女子中等教育機関が成立したのは明治二十年九月のことで、それはキリスト教徒による鳥取英和女学校の開設である。宣教師の鳥取市での伝道は明治十八年くらい『山陰隔日新報』にたびたび報道されている。その中には神戸

女学院の創立者タルカット女史の名前も見えている。これらの宣教師や鳥取市内のキリスト教徒中の篤志者によって女学校設立が企てられ、元魚町一丁目のキリスト教説教所跡に鳥取英和女学校が開設されることになったのである。

鳥取新報によれば、尾崎又次郎・岡垣春六・上島伝次郎の三人が設立の幹事としてあげられている。」

このような主旨によった英和女学校は、同年九月に開校したが、校則の第一条に「本校は智徳兼備の女子を養成する所とす」と言つて、智育を強調していた。教科内容は英語・数学・地理・歴史・家事・習字・作文(和・英)となつていた。修業年限は四年とし、満一二歳以上のものを入学させていた。授業料は月額三〇銭であつた。これを当時の物価に当てはめると、平均三升から三升五合の白米を買い取る金額であつた。

後に、修業年限が予科二年、本科四年、高等科一年の編成となり、校舎も元魚町から東町に移転し、井伊松蔵が校長となつて経営した。また家事の内容として裁縫・編物・家政学・簿記等も教えたが、英語・数学・理科・和漢学に多くの時間を割いて、普通教育に力点を置いたから、当時の鳥取県に於いては、最も高度な女子教育と言えよう。しかしこの学校の経営は極めて困難であつた。従つて教師達への俸給の支払は不安定で、サービスに近い状態にあつた。第一回の入学者数は三三人で、最多の在學生を持つた明治二十二年でも四八人に過ぎなかつた。しかしこうした乏しい中でも、教師・生徒とも、信仰の熱はすこしもさめることがなかつた。

明治二十五年の「鳥取県知事引継書」は、「此校ヤ宗教ニ誘導スルノ傾アリテ、他ノ学校トハ其趣旨ヲ異ニスルヲ以テ、或ハ国家主義ニ悖ルノ虞アルニヨリ常ニ深ク注意セリ」と記しているように、県当局からは警戒の目で見られていた。そしてついに経営が悪化して、明治三十五年に閉鎖されたのであつた。卒業生は少数であつたが、その中には牧師夫人となつて内助の功を立てた婦人も幾人かいたようである。

鳥取英和女学校の
教員・生徒数

年度(明治)	教員数	生徒数
20	4 ^人	33 ^人
21	3	45
22	5	48
23	14	47
24	6	45
25	—	—
26	6	25
27	5	27
28	6	26
29	8	31
30	7	29
31	7	38
32	6	41
33	6	37
34	6	37

以上が鳥取県史の内容の大筋であるが、鳥取市教育委員会が、昭和四十九年に刊行した『鳥取市教育百年史』^⑧では、県史に見られないタルカット女史に関する記事と、井伊松蔵氏についての記述が特に注目される。即ち「元魚町キリスト教説教所に於て、宣教師タルカット女史が、毎日午後三時から四時まで、同教徒の壮年に英語を教授し、婦人には、止宿所に於て教授し云々と鳥取新報明治二十年四月二十八日付に載っている。タルカット女史は、神戸女学院の創始者であるが、日本で女学校創設の経験をもつ宣教師と、鳥取市内キリスト教徒の篤志者の努力によって、鳥取英和女学校は開かれることとなったのである。」

明治二十二年二月十一日、大日本帝国憲法が制定された。そしてその翌年、教育勅語の発布をみた。このころからキリスト教徒と国粹主義者の対立ははげしくなり、井上哲次郎(東京帝大教授)は『勅語衍義』を著わすとともに、『宗教と教育の衝突』と題する論文を発表して、キリスト教と日本の教育とは相容れないことを述べた。このような時代の趨勢が、鳥取英和女学校にも波及してくるのである。

明治二十五年、鳥取県知事は、事務引継書に、「此校タルヤ宗教ニ誘導スルノ傾キアリテ一中略―深く注意セリ」と記録し、鳥取英和女学校を危険視するにいたった。県当局のといった態度は、教育勅語発布以来急激にもりあがった国家主義教育と国粹的世論におされた当然のなりゆきであったといえる。

ところで、このような県当局に対して、鳥取英和女学校長の井伊松蔵は、「鳥取英和女学校ノ主義及ヒ目的ニ就テ一言ス」『教育新報』第三号明治二十四年一月二日』という論文を発表し、世論に対する反論を行った。論旨は「英和女学校の『英和』というのは、日本を認識するために知識を外国にもとめ、広い視野の教育をするという意味である。鳥取英和女学校は、キリスト教布教のための学校ではない。人間をみな同胞兄弟とみる、キリスト教的な自由主義をめざした女子教育の学校といってよい。国権を無視したり、国家主義教育に反対しようとするものではない」と書いている。

次に、その記述内容が幾分異なると共に、鳥取英和女学校の創立年月日や、タルカッタ女史とこの学校との関係が鳥取県史の記述と異なった書き方をしている点で、『鳥取県教育史』^⑨も引用しよう。即ち「明治二十年（一八八七）六月の創立で、はじめ鳥取新町石井某の住宅をかりて開校した。キリスト教会と学校とを兼ねた形で、日曜日ごとに日曜学校も開いていた。校主はアメリカ人宣教師タルカッタ女史である。開校当時は修業年限三年、教師三人、生徒三十人ぐらい、本科と裁縫科の二科に分れていた。二十三年（一八九〇）にはお堀端箕浦屋敷に、のちまた県庁裏どおりに移転した。元来が伝道のために作られたような学校で、小規模ながら設備などよく整っていた。教師はアメリカ人が多く、ホールブルック（老女）地理・歴史担任、英語で教えた。セペランス（男）音楽、オルガンを使用した。ワールン（女）料理。内田 正、漢文・日本外史・文章規範等。大野竹窓夫人、和文。雪本女史、裁縫。また体操は、日本女子の前かがみの姿勢を直すため、生徒は頭上にあずき袋をのせて、レフト、ライトの掛声に合わせて行進した。少しでも姿勢がくずれるとあずき袋が落ちる。明治二十五年（一八九二）学制を改めて普通科を主とし、修業年限四年、学級数一、教員は男一、女三、女生徒三一、卒業生六。校長は井伊松蔵。かくて明治三十年頃まで継続したが、それ以後廃校となった。〔傍点は筆者が付したもの〕

年次	教員	生徒	卒業者	中途退学者
明治二十年	四	三三	一	一
二十一年	三	四五	一	一
二十二年	五	四八	一	一〇
二十三年	一四	四七	一	一
二十四年	六	四五	九	一一

註

二十四年教員六名中アメリカ人教師三名である。

本校はもっぱらキリスト教主義による女学校であるから、宣教師布教師の中から兼務したのである。従つてその教育方針はすこぶる進歩的であつた。」

この『鳥取県教育史』の特徴は、筆者が傍点を付した箇所、即ち創立年月を明治二十年六月としている点、またタルカット女史を校主、井伊松藏氏を校長と区別していることである。創立年月日については当時の認可申請書も許可証も県庁に残っていない現在では、この時点に最も近い時期に記録されたもので確かめるのはかたはな。幸い明治二十四年十一月七日付発行の『女学雑誌』二九〇号の地方通信欄に「鳥取英和女学校は明治廿年九月七日開校せり、同校の委員として創立以来尽力せられし井伊松藏氏は、今回同校の幹事を兼ねて漢学の教授を受持ちたり」と書かれている。この『女学雑誌』の記事は既述した井伊松藏氏の長男、井伊玄太郎氏によつても『山陰評論』中の「鳥取英和女学校の思い出」の記に引用されている。従つて創立年月日が明治二十年九月七日であつたことはまず間違いない。次にタルカット女史と井伊松藏氏との位置付けである。いずれの文獻も、初期は複数の信者の出資協力で、また校舎も私宅の利用でスタートした点を述べている。また当初の発起人の中には未だ井伊松藏氏の名が見えない。先に引用した『女学雑誌』二九〇号では井伊氏は幹事兼教師となつてゐる。こうしてみると全体の責任者が別にいた筈で、それがタルカット女史ではなかつたらうかと思われる。前述の『鳥取県教育史』の内容が何によつたのか明らかでない。

いが、タルカット女史を校主としているのは興味深い。

タルカット女史を創設者とする神戸女学院の歴史をみて、初期には伝道が主か、教育を中心に置くかで、経営上に問題点があった。^④ 伝道に主体があれば、その費用も名義も宣教師団が負ったが、教育が主で、伝道が従ということになると事情は異なってきた。特に鳥取英和女学校の場合、最初から自主自立的傾向が強かったので、宣教師側の援助も少なく、ひいては学校経営の名義の点でも、神戸女学院の場合と異なる進み方をしたのである。

鳥取英和女学校の創設される明治二十年頃には、鳥取の伝道は岡山ステーションの配下に属し、未だ正規の教会堂もなく、岡山配属の宣教師達が二日半かかって鳥取へ通うという状態にあった。この為、教会側も鳥取専任の宣教師を派遣して欲しい旨を伝道団や岡山ステーションに申し出る程であったから、タルカット女史も、創設当初は已むを得ないとしても、やがて鳥取専任者の校長が立つべきであると考えていたと思う。しかし、いつから井伊松蔵氏が校長と呼ばれるようになったのかは明らかでない。『女学雑誌』では明治二十五年の時点でも幹事と記している。従ってそれ以後正式に校長と呼ばれるに至ったものであろう。なお時代はるか後年であるが、一九〇一年(明治三十四年)LL九月号に寄稿しているメアリー・F・デントン女史の「日本の婦人」^⑤の中では井伊松蔵氏を Principal と書いている。

鳥取英和女学校が出発当初から苦しい経営であったことは、どの文献も書いている。これと関連して注意したいのは、鳥取英和女学校の開設に刺激されて、明治二十一年十一月に、私立鳥取女学校が同じ市中に設けられたことである。鳥取英和女学校が熱心なキリスト教信者の企画に基づき、米国人宣教師達の協力によって開設され、どちらかと言えば、あまり裕福でない市民層によって支えられてきたのに対し、鳥取女学校は、その年の一月に結成されたばかりの鳥取婦人会を中心として、県や郡の役人、市中の名士、教育関係者等を賛助員に仰いで募金活動を行い、早くも

十一月二十三日に開校した経緯がある。智徳兼備で自由主義的校風の鳥取英和女学校に対して、良妻賢母型の女性の養成を校風としたい鳥取婦人会側は、「本会創立ニ係ル鳥取女学校、先般県庁ノ認可ヲ得、十一月二十三日開校、第一回募集生ニ限り試験ヲ要セス入学ヲ許可ス。入学志望ノ諸姐ハ規則書御一覽ノ上、来ル二十日マテニ志願書御差出アルヘシ」と広告を出したが、応募者は二四名にとどまったという。なお、この年の鳥取英和女学校の入学者は四五名であった。しかし鳥取女学校は、あく迄も良妻賢母主義を振りかざし「本校は学問・技芸を授くる所にあらず」と言つて鳥取英和女学校に対抗した。

さて、有力な基盤に支えられた鳥取女学校は、明治三十年には市立高等女学校に、同三十四年には県下唯一の県立高等女学校になつて戦争中迄続き、戦後の学制改革によつて県立鳥取西高等学校と名称が変わつて現在に及んでいる。鳥取女学校が県立高等女学校に昇格した翌年の三十五年、孤軍奮闘してきた鳥取英和女学校は、学園の校門をついに閉ざすこととなつたのである。

消えてしまつた鳥取英和女学校ではあるが、十五年の歴史は決して消されることなく永久に伝えられ、残されることであろう。先に引用した井伊玄太郎氏の「思い出の記」、『鳥取教会七十年史』の中に載せられた卒業生の、学校・恩師・友達の話などによつても歴史の幾つかの断面を見る思いがする。しかし、ここでは同時代史とも言える『女学雑誌』二九四号（明治三十四年十二月五日）の中の記事を掲げることにとどめた。

「因州鳥取は昔し随分士風の厳なる所にてありしが明治廿年頃遊女場の出来てより男女共風俗を失ひ今は甚だしと云へり、されど潔白を好むの人亦なきにあらず、女風の挽回を企づるもの亦なきにあらず、茲に二つの婦人会あり、各々女学校を有す、一を鳥取高等女学校と云ふて多く保守派の婦人達が設けたり、生徒は五六十名にして何れも短机に座して読書せり、昔への寺小屋の如し、是れ彼の国粹てふものを重ずるの意か、但し他に訳のあるのか、他を鳥取

英和女学校と云ふ、是は進歩的の人々或は外国婦人の共立に係ると云へり、何やら温厚にして且つ清潔の風あり、是は前の保守学校の反対と云ふべく、隊を組みて朗吟し、又体操をなせり、末頼母數ぞ見へにける」。この文は二つの女学校の特徴を、当時の言葉で巧みに比較していて興味深い。また同誌の三〇三号（明治二十五年二月六日）には次のように書かれている。^④即ち「鳥取英和女学校は昨年来負債積りて、委員は之が為に腦を痛め、年末の関を越ゆるに余程の困難を感じたりしも、或る姉妹等が大いに之を歎き、東西に奔走遊説して、終に十二月三十一日の黄昏には、負債の全額即ち七十余金を會計の手に渡したり、これが為め去る一月五日午後三時同校に於て感謝会を開き、終に感泣堪へざるに至りしものありし。又ある姉妹等は本月を期して、貧民女子夜学会を組織し、貧家の女兒を教育せんと、当分は其学舎に本町なる寛婦宅を充つる由」。また三一九号（明治二十五年五月二十八日）に載せられている「山陰道通信」^⑤が、またこの二つの女学校の比較をしている。即ち「鳥取英和女学校は予て報道せし如く基督教主義を以て設立せられ、目的は國家に賢母良妻を養成するにあり、教師（幹事兼）は井伊松藏氏及び神戸英和女学校卒業村山、同校卒業四宮両女史外數名。外国教師はミストル、ロウランド（音楽）ミストル、セブランズ（英語）ミス、ギル（図学）等の諸氏にして、現在生徒の数は四十名、學業年限は六年（本科四年予科二年）普通の學術を教授す、当地の人士は未だ女子教育の必要を感じざるものの如く、地方より入学なさしむる者なく、皆な市中の姉妹のみなり、幹事井伊氏は夙に弱冠にして數年間犧牲的に身を同校に委ね、孜々として姉妹等の進歩發達に力を努む、本年七月第二回の卒業生（七名余）を出さんとせり、世人未だ氏の名を知らず、氏も亦世に聞を求めず、グレー氏の所謂「海底の真珠幽谷の美花」てふ人物にして実に山陰に於ける女子教育の奨励者なり、吾人は吾が地方の人士が女子の教育は、大にして社会の局面に、小にしては個人の家庭に、如何に其影響を及ぼすやを認識せんことを冀ふと同時に、同氏の彌々益々銳意熱心に從事せられんことを望むや切なり。

鳥取女学校は国粹主義を以て教育を施し、天晴れ往日の日本女子を養成するの目的なり、生徒は数十名にして裁縫生多数を占む。両校の教員及び生徒一同は、孰れも過る日鳥取近傍の浜坂なる海辺に於て愉快なる運動会を催ふしたり。」

以上が明治二十四年前後における二つの女学校の姿を述べた記事であるが、他に一種類の史料がある。第一次的史料である宣教師文書の中から、特に鳥取関係のものを拾ってみたい。但し既に引用したものは省き、その他の記事を年代順に掲げることとする。

『ミッシヨナリー・ヘラルド』(Missionary Herald —以下MHと略記)は一八八九年(明治二十二年)七月号に「鳥取に於けるリバイバル運動と教会形成」という表題を掲げ、^⑤「山陰道と呼ばれる鳥取・島根其他を含む地方は、岡山ステーションの一分野をなしている。中国地方の北側に在る鳥取市は人口三万で、この地は既にデフォレスト、ケーリの両師とタルカット女史や他の人々により、幾度か訪問されている。そして多くの人々が受洗しているが、去る三月二十八日迄は教会が組織されていなかった。^⑥岡山在住のローランド師は次のように書いている。

「五四人の男性と三〇人の女性によって教会組織が出来たが、更に後から受洗した七人も仲間に加わった。一中略一〇一名のメンバーによるこの教会は自立教会であるべきだと思う。日本の多くの教会がそうであるように、岡山教会も三〇人のメンバーによって自立しているのである。しかし、鳥取の場合、その殆んどが若い男女のメンバーから成っており、その若い女性は女学校〔鳥取英和女学校〕の生徒なのである。このように多くの会員は若い人々であるが、自立した教会になること、従ってミッシヨン・チャーチと呼ばず、自立教会と呼ぶことを熱心に望んでいる。」^⑦

この報告の出た翌年にタルカット女史がマクレナン女史と共に鳥取で活躍した様子は既に述べたところである。

ローランド師の報告に言う明治二十二年の鳥取教会成立をめぐる経緯は、一七年後に出たMN一九〇六年（明治三十九年）十二月十五日付の「鳥取特輯号」に詳しく述べられている。^⑤年代が前後して恐縮であるが、重複を避けながらしばらく引用してみよう。勿論報告者は同じくローランド師で、その表題は「鳥取ステーションの開設」となっている。

「鳥取から岡山に派遣された代表を通して、鳥取に駐在宣教師をほしいという強い要望に関する真剣な発表が伝道団に伝えられた。それは当時岡山に在った二家族の一方を鳥取に転任させることを、はっきりと求めるものであった。この数か月前に、ペティ、ローランド両師は、鳥取教会結成の機会に訪れ、信者達との親しい接触の中で数か月を過ぎた。そして鳥取市や、そこから西へ三〇哩に在る倉吉で、積極的な福音伝道を行った。こうしたことによって、土地の状況や地方の要望に詳しくなった。

その後、岡山ステーションは、自分達が直接入手した情報に照らしてみても、鳥取の信者の訴えを判断した結果、捨て去ることの出来ない懇願であると思った。鳥取県下の福音伝道は数年来、岡山の宣教師にとって懸案であった。そこで宣教師達は鳥取に対して、しばしば、又ときには、長期の訪問を行ってきた。二つの場所（岡山と鳥取を指す）が、険しい山越えの旅行で二日間もかかるといった分離された状況であったから、その機会を正しく判断しにくかった。数週間の祈りに満ちた熟慮の後、山越えをして裏側の地に、二家族の中の一組を送るのは良いことである、とステーションは要請に答える決定をした。しかし岡山ステーションが単独で新しいステーションを開設する資格を持つとは考えていなかったのも、この件を正式に伝道団に取り次ぎ、やがて伝道団は、一家族を鳥取に派遣すべきであるという岡山ステーションの決定を確認を与えた。しかし伝道団も米国伝道会による認定なしにそのような手続をとることを望まなかったのも、この件は終局的には伝道会に提出され、ボストンの理事会と年次総会に提出されることにな

った。そして既に理事会、日本伝道団、岡山ステーションに対してなされたように、この懇願は年次総会に対して訴えられた。なお神の摂理により、この大切な時に米国マサチューセッツ州ニュートンのエリオット教会 (The Eliot Church, Newton, Mass.) からの五〇〇〇ドルの特別な贈物が新事業開始のために捧げられた。この事は人々がしようとしていた計画を神様が促進して下さるかのようには思えた。岡山でためらいがちになされた決定が、ボストンでは熱心に確認されて、ここに鳥取ステーションは開設の第一歩を踏み出すに至った。ローランド一家は鳥取に到着し、鳥取ステーションは一八九〇年 (明治二十三年) 四月十日に開設された。そしてまもなくホルブルック、ストーン両女史の来鳥をみた。鳥取では既に二月二十三日に鳥取教会が発足しており、また四月十日には鳥取ステーションが開設されるなど、多忙な年であった。従ってローランド師も「マクレナン女史とタルカット女史は、この冬の大部分をこの都市で過ごした。そして幾つかの良い働きを残した。しかし、彼女らは、そうした仕事を臨時のものとしている。岡山ステーションには学校「山陽英和女学校」と他のきまった仕事があつて、彼女たちを手放すことが出来なかった。」と書いている。

なお、前述したボストンの年次総会に於ける、エリオット教会よりの献金の話は、そのオリジナルな記録が、MHの一八九〇年 (明治二十三年) 一月号に「マサチューセッツ州ニュートンのエリオット教会による、日本に於ける伝道拡大の目的に捧げられた特別の五〇〇〇ドルの贈物は、鳥取ステーションの開設に使われた」と書かれている。

LL一八九一年 (明治二十四年) 八月号には、当時の神戸女学院の状況と、鳥取英和女学校との友好関係を物語る史料があるので紹介したい。これは「コーベ・ホームからの便り」として、四月二十日付のエミリー・M・ブラウン校長による手紙である。その内容は「我々の負債支払いのお金が認められたという嬉しい知らせを前便がもたらしてくれました。私がこの学校に関わってから、負債を負うのはこれが初めてです。——中略——ソール女史が発出し、誰も女

史の部署を引き受ける見通しがありませんでした。我々は三月分の勘定を払うに足るお金をかき集めるのに苦勞し、充当金の減少のせいで、六月には全く学校を閉めねばならぬかという、どうにも仕様のない予測を持った程でした。しかし何という変化が生じたことでしょうか。鳥取ステーションの自己犠牲的好意により、婦人伝道会のテルフォード女史が、ソール女史の代わりに、当校の教師陣に加わって下さることになり、また一方で負債も支払われて、我々は学校を続けることが出来ると、確かな実感を得ています。このような祝福に加えて、校舎拡張の計画も、在アメリカの友人の何人かによって賛成して貰えました。そして今は御在天の神も、この建築に必要なお金を支出するよう家令にお命じになることでしょう。

真実を申しますと、どのような場合でも、学校の閉鎖を余儀なくされるということは、とても信じられませんでした。我々のミッシオンに一撃が加わり、雷鳴と希望や計画の崩れ落ちる音が我々の周りに轟いた時にも、ダッドレー女史とハウ女史、それに私はお互いに申し合いました。『我々の仕事をやめねばならぬとは思わない。W B M I 〔中部婦人伝道会〕は、我々が仕事を続けることの出来る道を、見出してくれるであらう』と。

こうした、当時の神戸女学院の校長ブラウン女史の手紙を読むと、明治二十〜三十年代に於いて、ミッシオンスクール経営者達の味わった苦勞の程が十分に察せられる。

また、一八九二年（明治二十五年）頃の鳥取英和女学校の苦境の様子を物語る、当時の教師アルモナ・ギル女史の手紙が、L L 一八九二年五月号に出ている。^⑧

「私は鳥取に来て、未だ一か月しか経っていませんので、仕事の手順が十分につかめません。しかし私達の前に広い分野が横たわっていることはよくわかります。私は力弱く、せねばならぬ職分を満たす能力については疑問を感じます。それでも、この地の哀れな婦人達を助けるために、私のような者でも用いて下さるように、また彼女達にとつ

ても、神が彼女達を待っているという神の愛がわかるように、私は神に祈っています。

鳥取には大変貧しい人々が大勢います。ここの教会の信者も、極めて僅かなお金しか持っていません。岡山では少女達の授業料は月に六〇錢ですが、鳥取では彼女達はやっと三〇錢しか出せないのです。従って教師達は、ここでは僅かの八円しか受け取りません。一方岡山では一二円の月給を受け取っているのです。先日、女学校〔鳥取英和女学校〕の先生が、六七円の負債の支払いについて、私達に何らかの援助がして貰えるかどうかを打診に来ました。先生達は最近、支払いの期限がおくれて大変に困っています。給料が五円である教師の一人は、生活が貧しいために、そのお金が必要であるにも拘らず、この三か月間というものは全く俸給を受け取っていません。しかし、この学校は、ここでのキリスト教伝道のためには、どのようなことがあっても生き延びねばならないのです」とこの先生は言っているのです。こうした犠牲を払うことをいとわないキリスト者達の姿を見ると、彼らが私達に援助を求めて来たことは正しいと思いました。」

先述のブラウン女史の手紙や、この鳥取のギル女史の手紙を通してても、当時のミッション系女学校の経営が苦しかったことが良くわかる。神戸女学院に於いては、幸いこの時期を切り抜けてソール院長の時代を迎えることになるが、鳥取英和女学校の方は、気の毒にも年毎に衰退の加わる状況にあった。MN一九〇一年（明治三十四年）三月号に、サミュエル・C・バートレット師は次のように述べている。

「我々の教会の牧師である井伊氏が校長をしている女学校では、かなり多くの人手が必要のようです。バートレット夫人の家事の管理が、彼女の女学校出講を許しませんでしたので、私が代わって二時間の英語のレッスンを週四回受け持ち、更に唱歌の組を週一回、その上にしばしば体操の手助けもしています。その他の先生と言えば、井伊夫妻がいるだけです。井伊夫人は出来る限りの仕事を雄々しくやっていますが、現在では、ひどく健康を害しているので

す。

学校の出席者は三〇名を少し越したに過ぎませんが、学校の精神は実に生き生きしているように見えます。同時に宗教的な感化も伸びています。この点で、私はデントン女史に深く感謝しています。こうした変化は我々にとっても大変嬉しいことです。」

また、L L 一九〇一年（明治三十四年）十月号に D・C・グリーン師の手紙が載っている。^⑤

「近年公立の女学校がこの都市に設けられたにも拘らず、鳥取英和女学校は、しっかりと学校の立場を守り通しています。こうした傾向は随所で見られます。それは女子教育に対する要望に答えるに十分な大きさや数が、公立学校にはないからだけではなく、私立学校の方が、もし優れた統制のもとに置かれるなら、生徒達に対して、より役に立つ監督が出来るからでもあります。しかしながら、今迄、キリスト教学校は、資金の不足と、資格ある熟練した教師を得るのが困難であるといったハンディキャップを背負って来ましたし、今もなお背負っているのです。」

後年、京都で活躍するメアリー・F・デントン女史も、若い時代に鳥取英和女学校で苦勞を共にしている。L L 一九〇一年（明治三十四年）九月号には、京都から投稿した一文が載っている。^④

「日本に於ける六〇の女学校のどの一つの例でも、各宣教師達が学校内で共に生活してきた女学生達について見た幾つかの興味ある話をするのでしよう。私もまた、田舎の学校の例として、鳥取英和女学校の生徒について話したいと思います。その後で同志社女学校に関する事柄が続けます。私は一〇年間も自分の財産を学校経営のために捧げてきたクリスチャン教会員達の克己心について、貴女に理解して欲しいのです。その人は女学校の校長の井伊氏で、俸給を受け取ることなく、少女達の運ぶお米で生活し、自分自身の身も心も学校に捧げているのです。その女学校の五七人の少女達はクリスチャンとなり、卒業生はすべてクリスチャン婦人として信頼と責任ある仕事に従っているの

です。」

最後に、鳥取英和女学校閉鎖前後の記事に若干ふれて結語としたい。

MN一九〇二年（明治三十五年）三月号に、H・J・ベネット師が次のように書いている。^⑤即ち「教会の牧師によって経営されてきていたキリスト教女学校は、最も不満足な状況に来てしまいました。従って牧師にとっては、学校経営を中止して、その時間を教会の仕事に専心捧げるのが賢明ではないか否か、一つの問題点となっていました。少女達は公立学校に入って、より良い教育を受けられるであろうし、又牧師はもっと牧会の仕事が出来るであろうと勧められました。しかし牧師は、学校は未来を持っているという堅い信念を抱いていましたので、結局教会の仕事の方を辞するのが賢明と考えるに至りました」と。

また同じMN一九〇三年（明治三十六年）六月号には、鳥取ステーションの一般報告^⑥として「鳥取ステーションの開設される以前から既に始まっていた女学校は、去年六月に閉鎖され、上級生達は京都で勉学が出来るように準備がなされた。そして下級生達の大部分は公立学校に転校した。——中略——女学校の前の校長井伊氏は、この地の東部、即ち但馬地区の伝道者となった」と結んでいる。

現地調査中、鳥取在住の研究者の手で、市内に在る諸資料を使って、宣教師達による英語教育について、手際良くまとめた研究のあったことを知って嬉しく思った。次の文献である。

○川口康子「鳥取市における駐在宣教師による英語教育について」

（鳥取女子短期大学研究所紀要、第二三号、一九八四年）

Yasuko Kawaguchi: On the English Teaching by the Resident Missionaries in Tottori City.

註

- ① 若山晴子「イライザ・タルカット女史略年譜」神戸女学院『学院史料』第四号 一九八六年、二三頁。
- ② 『神戸女学院百年史 総説』昭和五十一年、四六、六三頁。
- ③ 若山晴子・前掲書、二三頁。
- ④ 同前、二五頁。
- ⑤ タルカット書簡二六六号、「米国伝道会宣教師文書、一八八一—一八八九年」
- ⑥ 『同志社百年史』通史編(一) 一九七九年、九〇、一一七、七〇〇頁。
- ⑦ 『鳥取教会七十年史』昭和三十七年、六一八頁。
- ⑧ MN一九〇六年十二月号、三七—三八頁。
- ⑨ ローランド師は一八九〇年(明治二十三年)最初の鳥取駐在宣教師となり、一八九五年(明治二十八年)迄活躍した。一度帰国したが、再び来日して長く札幌で伝道に従事した。『鳥取教会七十年史』、『天上の友』第二篇に詳しく書かれている。
- ⑩ 松尾 茂『明治初期の鳥取県政』一九六一年、七八—八〇頁。
- ⑪ 『鳥取教会七十年史』、二二—二五頁。
- ⑫ ペテロはベティの聴き違いで、Rev. James H. Petteeを指すと思われる。
- ⑬ タルカット書簡三四号、「米国伝道会宣教師文書、一八九一—一八九九年」
- ⑭ LL一八九〇年七月号、二九六—二九七頁。
- ⑮ LL一八九〇年十月号、四四五—四四六頁。
- ⑯ ホルブルック女史は神戸女学院にとっても関係深い。『鳥取県教育史』は、同女史を紹介して「老女、地理・歴史担当」としているが、このような簡単な紹介では惜しい人物である。米国のマウント・ホリヨーク校出身で、ミシガン大学でも学んだ科学者である。一八八九年(明治二十二年)来日。ストーン女史と共に一八九〇年(明治二十三年)鳥取に赴任したが、翌一八九一年神戸女学院に移り、一八九六年迄の間、ブラウン校長やソール女史に協力して神戸女学院に理科を創設するなど、高等科の発足に尽力した。その他、理学館・音楽館の設計や、その工事監督も行った。この後一八九七年—一九〇二年の間、再び鳥取英和女学校に勤めるのであるが、この頃が鳥取英和女学校にとって最悪の時期であっただけに、同女史の苦勞の程が偲ばれる。同じくデントン女史なども、古い衣服のまままで寒さに耐えながら、この学校に奉仕した美談が残っているので、ホルブルック女史が未だ

四十代をそこそこであったにも拘らず、服装などの点から老女に見えたのであろうか。鳥取英和女学校の閉鎖後、一九〇三年―一九一〇年にかけて、同女史は再び神戸女学院に戻っている。

なお、一九一九年（大正八年）八月五日付の神戸女学院同窓会誌『めぐみ』第六七号に「故ドクトル、ホルブルック師の事ども」と題して、卒業生であり、かつては鳥取英和女学校の教壇に立った井深 花夫人の追憶文が出ている。

⑮ LL 一八九〇年十月号、四六九―四七〇頁。

⑯ 『山陰評論』昭和四十二年六月号、昭和四十三年五月号、昭和四十五年五月号の記事。

現在東京にてご健在の同氏に史料の件で問合せをしたが、「鳥取英和女学校研究の成果は、山陰評論の数冊に述べたものに尽きる」旨のお返事を頂いた。

⑰ 『鳥取県史』近代・第四巻、昭和四十四年。

同前、近代・資料篇、第五巻、昭和四十三年。

⑱ 『鳥取市教育百年史』昭和四十二年。

⑲ 『鳥取県教育史』昭和三十二年。

⑳ 『女学雑誌』明治二十四年十一月、第二九〇号、二五頁。

㉑ 『神戸女学院八十年史』昭和三十年、第一章 維持管理、一五―二二頁。

㉒ LL 一九〇一年九月号、三九八頁。

㉓ 『女学雑誌』明治二十四年十二月、第二九四号、二七頁。

㉔ 同前、明治二十五年二月、第三〇三号、二三頁。

㉕ 同前、明治二十五年五月、第三一九号、二二頁。

㉖ MH 一八九九年七月号、二八三―二八五頁。

㉗ 『鳥取教会七十年史』は教会設立年月日を明治二十三年二月二十三日としているが、ここで三月二十八日迄教会が未だ出来ていなかったと書いているのは、明治二十二年のことである。

㉘ MN 一九〇六年十二月号、三六一―四四頁。

㉙ MH 一八九〇年一月号、二頁。

㉚ LL 一八九一年八月号、三八一頁。

- ㉑ LL 一八九二年五月号、二四四―二四五頁。
- ㉒ MN 一九〇一年三月号、八八―九〇頁。
- ㉓ LL 一九〇一年十月号、四七五―四七八頁。
- ㉔ LL 一九〇一年九月号、三九二―三九九頁。
- ㉕ MN 一九〇二年三月号、一〇四―一〇五頁。
- ㉖ MN 一九〇三年六月号、一八六―一八七頁。

後記

鳥取での現地調査では、県庁、県立図書館、県立博物館の係員の方々に資料の点でお世話になり、又教会関係の年史や古い写真の件では鳥取教会の宮内常喜牧師、年史編集委員の政田二郎氏にも何かとご協力を頂いた。ともども厚くお礼を申し上げたい。

又膨大な量の宣教師文書の検索、原文・訳文の照合、その他校正等、極めて綿密な作業について、いつもながらの援助をして下さった史料室の若山晴子氏、吉田真紀さん、栗木順子夫人にも、末尾ながら感謝の意を表したい。老輩の筆者にとり、こうした若い方々の援助なしには、とうていこの小論も出来なかったと思う。